

第1回

乳幼児期にふさわしい保育環境を考える



講師 田宮 縁 氏

乳幼児期では何をめざしたらよいのか

平成29年の幼稚園教育要領の改訂で、「持続可能な社会の創り手の育成」が前文に掲げられました。この前文は、幼稚園だけでなく小学校から高等学校までの学習指導要領にも同様の内容が掲げられています。ESDは、20世紀後半より、教育の全面に打ち出されてきたものですが、SDGsの流れとあいまって、前文に力かが得られたものと思われまます。SDGsで大切なことは、「No one will be left behind」という理念で、それを実現していくためには、価値観の「Transformation」が重要です。また、特に、教育の分野では、ターゲット4.7「2030年までに、持続可能な開発と持続可能なライフスタイル、人権、ジェンダー平等、平和と非暴力の文化、グローバル市民および文化的多様性と文化が持続可能な開発にもたらす貢献の理解などの教育を通じて、すべての学習者が持続可能な開発を推進するための知識とスキルを獲得する」ということが重要だと思われまます。

環境を通して行う教育を基本とする

幼児教育は、環境を通して行うことを基本とするものです。乳幼児教育の環境とは、一体何かを考えていきたいと思ひます。

環境には人的環境、物的環境があります。その環境を構成する中で、子どもが主体的に関わり学んでいくことが大切です。人的環境、物的環境、自然事象、社会事象、空間、時間など主体を取り巻くすべてのものを環境といひます。私が訪れたある保育施設では、子どもたちが自然にウクライナの話をして

いました。子どもは敏感に社会状況を察知していません。幼児教育で最も大切にしたい環境として、人や物が醸し出す雰囲気があります。その園の雰囲気から、園が大切にしていることをある程度読み取ることができるのではないのでしょうか。子どもは、敏感に感じ取っていると思ひます。

では、なぜ環境を通して行う教育という方法をとるのでしょうか。子どもにとって学びは、効率よく物事を教えるよりも、子ども自身が興味や関心をもって必要感に基づいて環境に働きかけた方が適しているからです。例えば、子どもが花を見て「きれいだな」と感じた時に、花の名前や花びらの枚数、色、形、匂いなど、それぞれの興味に応じて知識を広げていきます。効率よく数を教えたり、言葉を教えたりして教え込ませるよりも、知りたいと思ったとき、つまり、子どもの必要感に基づき援助をしていく方が子どもにとってあっているということです。これは、好奇心が旺盛であるという子どもの発達の特性に基ついた教育方法です。

その根底にある子ども観というものは、「子どもは自ら伸びていく。子どもは種のようなもので水とか日光とか大気があることで育っていくものだ。」という考え方です。環境を整えれば、植物は育っていくという考え方が基本となっています。

保育プロセスの質リフレクションシートについて

保育プロセスの質リフレクションシートは、保育プロセスの質向上のために園内研修での活用を想定してデザインしています。コンセプトは、「安定感」、「必要感」、「達成感」から保育実践をリフレク

ションすることをめざしています。この視点から第2部では日常の実践を自己評価していきます。特に、実践者からの質問が多いところを取り上げてみたいと思います。

「保育者は、素材の変化や磁石の性質など、子どもの年齢にふさわしい科学的な概念に親しめるような環境を計画的に取り入れている。」という項目ですが、幼児は遊びの中で「どうしてだろう」という不思議さを感じたり、必要感を感じたりしたときにすぐ使うことができるような知的好奇心をくすぐる環境を構成することが大切ですよにしておくことが大切です。また、「保育者は、順番待ちリストなど必要感に基づき書いている姿を子どもに見せている。」というのは、皆さんがレストランなどで待つときに記入するリストのことです。年長になれば、少人数で、手応えのある活動にじっくり取り組む体験も必要でしょう。さらにこの項目では、保育者がモデルとなり、子どもたちに文字の利便性を見せてくという意図もあります。最後に「ごっこ遊びのコーナーには、異なる人種や文化の人形や食べ物が置かれている。」という項目は、これからの社会では、まずは、保育者自身が多様性を意識し、その思いを環境にこめていくことが必要となります。

リフレクションシート第2部の具体例

宮崎県の三股町にあるひかりの森こども園という社会福祉法人の園です。お寺が運営しているこども園で、児童発達支援センターや放課後児童クラブや不登校の子が集まって勉強する場所になっていて高齢者が働いているカフェも運営しています。

このこども園を訪問したとき、年長さんがその日のおやつに食べるとうもろこしの皮むきをしていました。また、毎日の昼食は自分たちでお米を研いで保育室内にある炊飯器で炊いて食べていました。乳幼児教育は、遊びと生活があり、日常生活の中で

子どもは様々なことを学んでいきます。年長児の保育室では、はかりや磁石が置いてあります。環境を通して行う教育とは、子どもが必要と感じたときにすぐ使えるようになっていることが重要です。そして、はかりもデジタルのものではなく、子どもが見てわかりやすいアナログなものが望ましいです。保育室には、子どもの「やりたい」と思ったときにすぐ道具を使ってできるように、工作のコーナーや文字や絵を描くコーナーもあります。絵本のコーナーでは、ラグが敷いてあり、ソファがあります。家庭と同じように、くつろいだ雰囲気の中で本を読んで欲しいという園の思いが環境に表れています。保育の環境の中には、くつろげる空間は必要です。子どもは、広い場所よりも狭い場所を好みます。ままごとのコーナーもお家の中のような雰囲気でベビーカーがあつたりベッドがあつたり、すぐ遊び出せる空間を作っています。

先ほどの順番待ちリストは、じっくり少人数で関わって遊びたい遊びに用いるとお話しました。例えば、年長児で針と糸を使ってフェルトの人形を作りたいというときには、1人の保育者で見ることのできる子どもの人数は5人ぐらいなので、椅子5個を用意し、また次にやりたい人には順番待ちリストに名前を書いて、1人終わったら次の人を呼ぶという形の遊び方にするると質の高い体験が子どもたちに提供できます。

ピカピカの泥団子の表面にマーブリングをする活動やマリーゴールドの花の色水を使って染め物をする活動なども、少人数でやりたい人からやっていくことで、丁寧に見届けることができます。

幼児教育のカリキュラムについて

カリキュラムには、児童中心主義カリキュラムとを系統主義カリキュラムがあります。児童中心主義カリキュラムは、あくまでも子どもたちの主体性を重んじていくもので、系統主義カリキュラムは、内

容の配列を大切にしています。環境を通して行う教育は児童中心主義カリキュラムになります。環境に保育者の願いやねらいを込めますので、**CB型**になります。一方、例えば、栽培活動は子どもが前もって考えることは難しいです。夏の野菜を育てるときに、苗を購入したり、どの時期に植えたり種をまいたりすればいいのかというのは、保育者が計画していかなければなりません。もちろん保育者が全て決めてしまうのではなく、子どもに「夏の野菜で何を栽培したい？」と聞きます。すると子どもたちから「ピーマン。」とか「ナス。」だとか、「トマト。」という答えが返ってきます。内容は配列していきますが、そこに子どもの思いや願いを指導の方向性として入れていく**SB型**のカリキュラムも幼児教育では必要です。小学校の教育も生活科や教科教育も、**SB型**になります。

ひかりの森こども園については、**CB型**のカリキュラムで、環境に子どもたちが主体的に関わっていました。

次に、**CB型**の好事例として、藤枝市の志太こども園の5歳児クラスの実践を紹介します。1ヶ月前の参観では、日本平動物園に行くという計画をしながら、割り箸や牛乳パックを使ってパクパクする手作りのおもちゃを作って楽しんでいました。動物園遠足が終了した本日参観したところ、子どもたちが自分たちの動物園を作っていました。レッサーパンダ館や猛獣館、草食動物のハウス、北極ハウスやふれあい動物園などを作っていました。指導案の中にも予想される子どもの姿が書かれていました。また、配慮する子をどのように配慮していくのか、どんな子どもの様子があるか等も書かれていました。

以前は、みんなで同じパクパクする手作りおもちゃを作っていた子どもたちが、動物園に行った後で、自分たちの動物園を作りたいという気持ちになりました。そこで、様々な素材が必要になってきます。いろいろな素材を置いておくことで、動物園という

環境の中で学んだことをイメージして、子どもたちなりに形にして作り出すことができます。日本平動物園に行ったことある方はおわかりだと思いますが、このレッサーパンダのスペースには橋みたいなものがあったり、池のようなモートがあったりします。それらを子どもたちは見て覚えていて、作っています。上に上がっていく階段があるのですが、それを作っている子もいました。ふれあい動物園のモルモットを作っている子もいました。うさぎより小さくて、たくさん集まっている特徴もしっかり表現されていました。こうやって子どもたちは、見た特徴を表現しています。動物たちの暮らす囲いも、トイレトペーパーの芯をいくつもつないで作っていく子たちもいれば、いろいろな空き箱をつなげて使って作る子もいます。

猛獣館の猛獣を作っている子たちが、空き箱を高く積み上げていたので「何を作っているのだろう？」と思って見ていると、ピューマの層になっている岩場を作っているところでした。途中でバランスが悪くなり、崩れてしまいましたが、子どもたちで考えて、バランスを直したり支えを作ったり、岩のような色の色紙を貼ったりしながら完成させていました。こうして子どもたちは考えて作りながら、様々なことを学んでいます。**SB型**ではあるけれど、子どもたちの思いでどんどん遊びが変わっていきます。少し前の指導案では、動物園に行くことは書いてあるものの、具体的にどういった遊びになるかは書かれていませんでした。子どもたちは、日本平動物園に行ったことにより、「自分たちの動物園を作りたい。」と、共通のイメージが膨らんできました。その時にどういった環境を用意するかが重要です。保育者がどんなイメージをもっているかで環境構成は大きく変わっていきます。

子ども理解が根底にあって初めて、遊びの発展や深化があります。子どもの興味や関心をどのように捉えるかです。それから、活動のまとめです。す

べて子ども任せにしないで「こんな活動、こんな保育ができるかな。」という保育構想をもつことが大事です。そして子どもの思いや願い、経験を合わせて柔軟な対応をしていくことが大切です。コロナ禍で機会が少なくなっているのですが、遊びの発展には「共通の実体験」が大切です。日常生活の実体験から数量や図形、人との関わりを学んでいます。

保育環境について①小規模保育所

富士市の小規模保育事業所の様子です。

こちらは、公立の幼稚園の一つの保育室を使って保育しています。この公立幼稚園と近くにある公立保育園が連携施設となっている小規模保育者です。この保育室には、牛乳パック等で作ったパーテーションや手作りの玩具があり、子どもたちに合ったものを保育者が手作りしていました。それも、100円ショップで売っているようなものや身近な廃材を使って工夫して作っています。



保育環境について②アフォーダンス

この砂場で遊んでいる写真を見て、何か足りないと思いませんか。日よけがないのです。子どもたちが遊ぶ場には、先ほど紹介したひかりの森こども

園の絵本のコーナーのように、心地よさが大切です。

乳幼児教育には、アフォーダンスが大切です。無意識のうちに、ついついやりたくなくなってしまう環境のことをいいます。アフォーダンスとは、「環境が動物に提供する『価値』のこと」であり、「環境が動物に与えるために備えているもの」です。しかし、その環境の知覚については環境における主体に任されています。丸太を埋め込んだ遊具もそのままより、足跡を描くことで、ついついその上を歩いてみたくなります。歩いてみたい人もいれば歩いてみたくない人もいます。いろいろな環境の知覚については、主体に任されているのです。

おわりに

先ほどの動物園を作っていた園では、保育構想があり、ねらいがあって保育が展開されてきました。しかし、実際日本平動物園にいったところ、保育者の予想より子どもの遊びが広がり、何日もかけて遊んでいました。そこが小学校教育とは違うところです。小学校は一つの単元の授業時間が決まっていますが、乳幼児教育は、子どものやりたいことをやりただけ追求していくことができます。その中に学びがあり、価値づけていくことが重要です。子どもたちが体験する内容によって子どもの思いが膨らみ、保育の内容はどんどん変えていけるのです。遊びが継続するのは、子どもたちの発展や深化によって変わっていきます。必ずそこには環境が重要で、子どもの思い描いたようなものが実現できるような素材が必要です。

一番重要な環境は、人的環境です。保育環境とは、小手先のものではありません。保育者の子ども観、生きている価値観により実際の環境構成は全く違います。「No one will be left behind」という価値観を保育者が持てるかが重要なのではないのでしょうか。

第1回 焼津市保育者資質向上研修会
令和4年6月24日（金）
会場：焼津市役所 会議室1B